

2020年2月8日，武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻セミナー

田村学氏「新学習指導要領の方向性」
—— 深い学びの実現に向けて ——

(記録者) 酒井 達哉

SAKAI Tatsuya

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第16号 2021年

【セミナーの記録】

2020年2月8日, 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻セミナー

田村学氏「新学習指導要領の方向性」

——深い学びの実現に向けて——

(記録者) 酒井達哉*

SAKAI Tatsuya*

2020年2月8日, 14時から16時まで, 國學院大學人間開発学部教授の田村学氏をお招きして, 大学院教育学専攻主催のセミナーとしての講演会を行うことができた。参加者は大学院生, 学部学生(他学科を含む), 大学教員, 一般の教員を含めて89名であった。

田村学氏は新潟県公立小学校教諭, 上越教育大学附属小学校教諭, 新潟県柏崎市教育委員会指導主事, 文部科学省・国立教育政策研究所教科調査官を経て, 2015年4月より文部科学省初等中等教育局視学官, 2017年より國學院大學人間開発学部教授を務められている¹。

田村学氏は, 前・文部科学省初等中等教育局視学官として新学習指導要領のベースを築いたキーパーソンであり, 教員養成に携わる傍ら, 全国各地での講演会や執筆活動を通して, 今改訂の意図を伝えられている。本講演では, 新学習指導要領実施の鍵となる「主体的・対話的で深い学び」の中の「深い学び」に焦点をあて, その構造を解き明かしていただいた。

本記録は, 田村学氏の講演内容を筆者が要約したものである。なお, 当日は参加者とのやりとりも多かったが, 以下では講演内容の趣旨を要約させていただいている。

今日は, 新しい学習指導要領の本格実施を目前に控えて, どんなことを考えていけばよいかということと一緒に考えていきたいと思います。

今回の教育課程の基準の改訂は, 幼児期の学びを小学校につなぐ, そして小学校から中学校へ, さらに高等学校につなぐといった, 授業の大きな改善です。よい授業をしている学校に共通するのは, 「学習する子どもの視点」に立っているということです。これが今回の学習指導要領改訂の論点整理に出てきた重要なキーワードです。つまり, 教師中心から子ども中心, 学び手を中心に考えていこうということです。これを考えるときに気を付けなければいけないことが二つあります。一つ目は, まさに学び手を中心でない実際の

社会で活用できる力は付かないということです。二つ目は, 学び手を中心だからといって, 教師が何もしないなんて話ではないということです。学び手を中心ということは, むしろ, 教師は指導性を発揮することです。つまり, 子どもの主体性と教師の指導性は, 二項対立ではなくて, むしろ, 相乗効果で高め合うものであると思います。

今回の学習指導要領の改訂においては, 実際の社会で活用できる力としての資質・能力の育成を目指しています。もちろん, それを目指す上で「何を学ぶか」も大事ですが, むしろ, 「どのように学ぶか」ということが, これまで以上に重要になってきます。このなかに「主体的・対話的で深い学び」という言葉が出てきますので, 今日は少しわかりにくい「深い学び」に焦点を当ててみたいと思います。

1. 「深い学び」とはどのようなものか

「主体的・対話的で深い学び」を実現するには, 両輪があって, 一つがアクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善, 授業のイノベーション。もう一つがカリキュラム・マネジメントの充実です。なお, 豊かな学びとは, ある面から見れば主体的で, ある面から見れば対話的で, ある面から見ればきっと深いということだと思います。

「深い学び」には次に挙げる五つのタイプがありますが, キーワードは「つなぐ, つながる」です。

(1) 知識がつながるタイプ I —ネットワーク化—

授業中, 討議をする中で, 発言を繰り返すうちに発言の内容のレベルが上がる子どもがいます。自分の知識と他者の意見がつながり様々な知識がネットワーク化されたことで, 考えの質が一段, 向上したのです。一個一個の知識がつながりネットワーク化される, これを精緻化, 英語では *elaboration* というそうです。

具体例を挙げると, ある小学校6年生の社会科の授業で, 徳川幕府はどのように地方大名を支配していたかを調べて, 発表して, 話し合いました。そうすると,

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

ある子どもが、「一つ一つの施策がそれぞれに関係があつてつながっていて、総合的な施策になっている。結果的に地方大名の財政力を弱めて、より安定的で持続的な支配関係をつくらうとしていた。」と発言しました。このように、一個一個の知識がつながると、上階層の認識、概念になるのです。

(2) 知識がつながるタイプⅡー概念的な知識へー

ネットワーク化の別のタイプは、最初に中心となるような概念を獲得しておいて、そこに個別の知識がつながってネットワーク化されるものです。最初に獲得した概念は中心概念とか鍵概念と言われていました。

例えば、ある小学校2年生の生活科の授業で一生懸命に大豆を育て、みんなで振り返って話し合いをした際に、ある子どもが「植物の成長は人間の命みたいだ。」と発言したのです。植物の成長と人間の命がつながったのですね。さらにおもしろいのは、この話を聞いてた他の子どもの様子です。その発言の瞬間、他の子どもの表情がぱっと変わったのです。これは何か腑に落ちたみたいな感覚で、皆さんにもあるのではないかと思います。

(3) 手続き的な知識がつながるタイプ

小学校3年生のリコーダーの学習で、専門の先生はお腹には力を入れるよとか、姿勢は大事よ、背筋伸ばすよ、足を着くよ、という演奏のポイントを指導されます。子どもが実際に吹いてみるといい音が出るので、リコーダーの演奏には「お腹も大事だな」などということがわかります。これは、一個一個の方法や手続き的な知識がつながり、パターン化する感じです。しかも、身体とつながると、よりなめらかにできるのです。

そうすると、陸上の走り幅跳びも多分そうですね。真っ直ぐ走って行って、最後の3歩、歩幅を短くして、垂直方向から蹴った瞬間に反対の脚を上げるようなことがうまく連動すると、ハイパフォーマンスになる。同じように、跳び箱もきっとそうですね。この一個一個の知識の中には、もしかすると最重要な知識があるかもしれないということです。これがよく言うコツというものです。あるいは、この知識は何でも前から順番にやっていたらいいわけじゃなくて、身に付きやすい順番があるかもしれないということです。これが、言ってみれば近道とか早道というものだと思います。

(4) 知識と場面がつながるタイプ

ある中学校の体育の授業で柔道の支え釣り込み足を学習しました。生徒は、この技がよりよくできるため

にはどうすればよいかという問題解決のために「思考・判断・表現」していきました。授業の中で、ある生徒は支え釣り込み足では軸足が大切であることを学びました。そして、この軸足という知識は、サッカーでも野球でも使えるということに気付いたのです。つまり、この知識は、あそこでも、ここでも使えるという状態になり始めてるということです。こういう状態の知識は、次の新しい場面や違う状況、未知の場面でも使えるものになり始めているのです。これが汎用的になるとか転移するということです。つまり、知識が次々と違う場面や状況と結びつき、自由自在に使えるものになっていくということです。私達は、子どもにどんどん知識を自由自在に使って考えてほしいのです。

(5) 知識が目的や価値、手応えとつながるタイプ

東京の小学校5年生が、総合的な学習の時間にヒアリの調査を行いました。その結果、校内にはいないことがわかりましたが、子どもたちは再調査したいとのことでした。「先生、見つけたら、きっと大発見になるんじゃない。僕たち有名になれるかもしれない。」と言いました。そのうち、「先生、いないということが大事なんじゃないの。」と言い、次の子が、「先生、そのことが、地域が安心・安全でことなんじゃないの。」と言うのです。そして、最後は、「先生、そのことこそが地域を守るということなんじゃないの。」と言ったのです。

つまり、ヒアリを調査するという知識は、最初、功名心と結びついていました。有名になりたいという話です。ところが、徐々にみんなのためとか、地域のためとか、公共のためという、より高い目的や価値と結び付き始めた。このように子どもたちの知識はより高い目的や価値と結びつけば、より適切で適正になっていくのです。しかも、やってよかった、してよかったという、手応えと結び付くと、まさにその知識は、また使ってみようということになるのです。

2. 活用・発揮が「深い学び」の条件

ここで「深い学び」を整理するならば、知識が相互に関連付いて、構造化されたり、身体化されたりして高度な状態になり駆動することです。駆動するというのは、英語で言うとドライブです。四輪駆動の駆動、つまり、自由自在に動ける、少々の悪路も乗り越えられる、このようなイメージを持つといいのではないのでしょうか。

それではその関連付けを実現するにはどうすればよいのでしょうか。それは、一言で言えば、「活用・発揮」することです。これが大事だと思います。頭の中の単

独系の知識は、残念ながら失われやすく、すぐはがれていくものです。しかし、使えば使うほどつながっていきます。つながった知識を関連系といいます。関連系の知識は失われにくいものです。こういう知識をつくっていくことが大事なのです。しかも、こういう知識は、使い勝手がよく、自由自在に使える知識になっていきます。そう考えると、授業の中で「活用・発揮」することが重要で、そうすると我々の頭の中の知識はどんどんつながっていくのです。使えば使うほど、どんどんつながりネットワーク化していく、こんな感じだと思うのです。

3. 授業改善に向けて

ここまで話してきたことを踏まえて、学校ではどのように授業改善をしていくのか考えていきたいと思えます。

まず、「活用・発揮」の授業を効果的に行う意味でもアクティブ・ラーニングは欠かせません。知識は、テストの穴埋め問題のように、固定的な、静的なもののイメージだけではなくて、もう少しつながって動的なダイナミズムなものをイメージするといいいのではないのでしょうか。

例えば、子どもが、授業中にいろんな情報を手に入れて発信するとします。内化と外化といいます。これに積極的に立ち向かったりすることが、「主体的」ということです。しかも、自分でうまく具合にコントロールできるといいのです。そうすると、いろんな情報が手に入ってくるのです。そして、それをいろんな人に話すと、「対話的」ということになります。この「主体的で対話的」な学びをしているときに、子どもの頭の中がフル回転するのです。ただ、じっと聞いてるときよりも、圧倒的にフル回転する、これがアクティブ・ラーニングです。頭の中がアクティブになるということです。

そのときに何が起きるかという、持っていた一個一個のばらばらな知識のピースがつながってネットワーク化していくのです。一個一個のばらばらな知識を上手に組み立てると塊ができてくるというイメージを持つと授業の構造が考えられてくることでしょう。

次に、授業の中でこれまで以上に話し合い、ディスカッション、学び合いなどを取り入れていくことです。例えば、北海道の中学校3年生の数学の授業で、データの活用という新しい内容をやっていました。ある生徒が、授業中、とても楽しそうで、にこにこしているのです。授業後のインタビューでは、この子はやはり「授業中の話し合いは大好き」と言っていました。先

生の話はずっと聞いてると、何か詰まってくる。」と言っていました。さらに、「自分の考えを言えるですっきりする、だんだん詳しくなっていく感じがする。それが勉強なんじゃないか。」と言っていました。やはり、授業中の自分からの積極的な発言だとか意見交換は、学び手にとっては楽しいということだと思うのです。

なお、このような授業を展開するための「主体的・対話的で深い学び」を実現する教師力として、① 子どもの姿や発言を丁寧に見る、聞く（捉える）、② 子どもの思いや考えを理解する（解釈する）、③ 本時のねらいとの関係を考える（照合する）、④ どのように振る舞うかを決める（判断する）、⑤ 分かりやすく板書したり、端的に発問したりする（振る舞う）の五つを挙げることができます。

また、話し合いに加えて、グループのディスカッションなども大事です。グループのディスカッションの質を上げるためには、思考ツールを使うとよいです。思考ツールは、考えるということを実現するための都合のいい道具なのです。たとえば、関連付けるときには、マインドマップ、イメージマップ、ウェビングマップ、原因と結果に分けたいときにはクラゲチャート、統合したいときにはピラミッドチャート。このように思考ツールは音声を目視化・操作化することで子どもの学びを確実にするのに役立ちます。

もう一つのポイントがリフレクション(熟考)です。子どもは書くことで熟考します。これをかなり丁寧にやるだけで授業は随分変わると思います。ところが、授業はどうしても終末のところがちよっとなおざりになるのです。ごめんね、時間切れというように。そこで、授業の終末をもう少し丁寧にやろうということですね。そうすると、最後の終末に少し長めの文字言語での記述が大事だと思います。それは、前述したように、頭の中の知識や情報をつなげたいからです。頭の中の知識や情報、いわゆる内言というものは、ぼっと浮かんで消えるでしょう。これは最初からつながってないのです。これをつなげるための方法が二つあって、一つが音声言語、一つが文字言語です。音声言語は少し柔らかくて緩やかなのですが、広がりやすい分、少しあいまいです。文字言語は、自分で自覚するにはかなりよい方法です。簡単に言うと、この音声言語はインタラクションで文字言語はリフレクションです。授業は音で広げて文字で刻む感じですね。そんな授業をしていけるとよいと思います。

最後に、何よりも大事なことは、目の前の子どもの姿を事実と結びつけて理解するということです。例えば、研究授業後の協議会においては、固有名詞と具体

の事実で語るのです。「今日、あの子がこう言っていた言葉がこう変わったよね、あれは深いね。」などと語れるとよいですね。

今日、皆さんと御一緒させていただいて、まさに皆さんがこういった子どもの姿を実現してくださる方たちになるんじゃないかなと非常に強く期待しているところです。これはやっぱり教師力というものだと思います。腕を磨いて自分のものにした方こそが、将来にわたって、豊かで幸せな教師としての人生が送れるのではないかなと思っています。

以上で終わります。ありがとうございました。

(文責：酒井達哉)

注

- 1 田村学氏の最近の著作としては、『ポスト・コロナの学校を描く』（教育開発研究所、2020年）、『イラストで見る全単元・全時間のすべて 生活 小学校2年』（東洋館出版社、2020年）、『問い、対話、振り返りによる中学校の授業改革』（小学館、2020年）、『深い学び』（東洋館出版社、2018年）、『「深い学び」を実現するカリキュラム・マネジメント』（文溪堂、2019年）など多数ある。